

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	サムエルガーデン I NAKAGAWA(児童発達支援)		
○保護者評価実施期間	2025年 11月 1日		～ 2025年 12月 25日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	17人	(回答者数) 5人
○従業者評価実施期間	2025年 11月 1日		～ 2025年 12月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7人	(回答者数) 5人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 15日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	空間を活かしたアットホームな療育：面積のコンパクトさを逆手に取り、指導員の目が細部まで行き届く「高密度な見守り」を実現しています。子どもの微細な表情の変化や行動の予兆を逃さない体制が整っています。	月次プログラムの新規策定：毎月、季節感や子どもの興味に合わせた新しいプログラムをゼロから作成。子どもたちが新鮮な気持ちで取り組めるよう、教材や活動内容を工夫しています。	アセスメントとの連動性の強化：毎月のプログラムが、個別支援計画のどの目標（例：手先の巧緻性、ルールの遵守など）に対応しているかをより明確にし、療育の根拠を深めます。
2	「室内×屋外」のハイブリッド運用：室内療育だけでなく、毎月計画的に屋外療育を組み込むことで、運動欲求の解消と社会体験の機会をバランスよく提供できています。	環境の構造化：限られたスペースだからこそ、パーティションや視覚的な提示を活用し、「今は何をやる時間か」を子どもが直感的に理解できるような環境設定（構造化）を徹底しています。	屋外療育のバリエーション拡大：近隣公園だけでなく、地域の公共施設や店舗等との連携を広げ、より実戦的な「社会適応訓練」の機会を増やしていきます。
3		スモールステップの設定：プログラムごとに小さな成功体験を積み重ねられるよう、個々の発達段階に合わせた難易度調整を意識しています。	振り返り（PDCA）のシステム化：実施したプログラムの効果をスタッフ間で数値・記録として蓄積し、1号店独自の「療育メソッド」としてパッケージ化することで、支援の質のさらなる安定を図ります。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	多動傾向のある子への対応の難しさ：室内面積が限られているため、大きく体を動かしたい衝動がある子や、クールダウンが必要な子に対して、十分な距離や個室スペースを確保しにくい。	物件構造の限界：1号店は立ち上げ時の規模を優先したため、多目的スペースの分割が物理的に困難であり、環境による「自動的な切り分け」が機能しにくい。	時間差・グループ別支援の徹底：狭い空間を時間やパーティションで区切るだけでなく、児童の特性に合わせて「屋外組」と「室内組」を完全に分けるなど、同一空間にいる人数を最小限にするシフト管理の強化。
2	静と動の切り替えの難易度：同一空間で異なる活動を行う際、他の子の声や動きが刺激になりやすく、集中を維持するための環境設定に限界がある。	受け入れ児童の多様化：質の高い療育（室内・屋外プログラム）が評価される一方で、支援度の高い児童や異なる特性を持つ子が同時に利用する機会が増え、従来のレイアウトでは対応しきれない場面が出てきている。	「視覚的構造化」の更なるブラッシュアップ：物理的な壁は作れなくても、床のテープングやカーテン、パーティションの色分けを徹底し、子どもが「自分の領域」を脳内で認識しやすい工夫を強化する。
3	取納と動線の競合：プログラム用の備品が増える一方で保管場所が限られ、活動スペースを圧迫したり、子どもの動線と重なったりするリスクがある。	屋外療育への依存度：室内の狭さを屋外活動で補っているが、悪天候時には室内での活動が密集し、ストレス値が高まりやすい構造的要因がある。	備品の厳選とデジタル化：物理的な教材を減らし、プロジェクターやタブレットを活用した「場所を取らない療育コンテンツ」を導入することで、活動スペースを最大化する。

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	サムエルガーデン II NAKAGAWA (児童発達支援)		
○保護者評価実施期間	2025年11月 1日		～ 2025年12月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	15	(回答者数) 4
○従業者評価実施期間	2025年11月 1日		～ 2025年 12月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 4
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 1日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・スモールステップによる自尊心の育成：毎月のプログラムを幼児期の発達段階に合わせて細分化。小さな「できた！」を積み重ねることで、就学前に必要な自己肯定感を着実に育てています。	・徹底した構造化と視覚支援：言語理解が未発達な時期であることを考慮し、写真カードやイラストスケジュールを用い、「次は何をするか」が直感的に分かる環境を整えています。	保育園・幼稚園とのアウトリーチ連携：事業所内での様子だけでなく、集団生活の場(園)での課題を共有し、一貫した支援を行うための連携会議や訪問支援を強化します。
2	・「静」と「動」の切り替え能力の習得：室内での知育的活動と、屋外での粗大運動を組み合わせることで、幼児期に課題となりやすい「気持ちの切り替え」を自然な形で促しています。	・感覚統合を意識したプログラム：室内では粘土やシール貼り等の微細運動、屋外では砂遊びや遊具を使った全身運動を取り入れ、感覚の偏りや未発達な部分を遊びの中で刺激しています。	就学準備(プレ・スクール)プログラムの導入：年長児に対し、45分間座って活動する練習や、身の回りの整理整頓など、小学校入学をスムーズにするための「就学準備クラス」の枠組みを検討します。
3		・密な保護者コミュニケーション：送迎時や連絡帳を通じて、その日の「できたこと」を具体的に共有。家庭での関わり方のヒントを提案し、保護者の不安解消に努めています。	アセスメントツールの活用とフィードバック：発達検査の結果や日々の観察記録をグラフ化するなど、客観的なデータに基づいた成長の記録を保護者に提示し、支援の方向性をより明確に共有します。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	カームダウン(静養)スペースの確保が困難：感情の起伏が激しい幼児がパニックになった際、他の子から離れて落ち着ける「個室」や「遮断されたスペース」の確保が難しく、相互に影響を与えやすい。	年齢・特性の混在：2歳から6歳までという発達段階の幅が広い児童が同一空間にいるため、年上の子の活動音が年下の子の刺激になったり、逆に年下の操作する玩具が年上の集中を妨げたりする。	「仕切り」の工夫による個別空間の創出：固定の壁は作れなくても、可動式のパーテーションや「隠れ家」のような小さなテントを導入し、視覚を遮断して一人になれるコーナーを設置する。
2	粗大運動(全身運動)の制限：就学前のエネルギー溢れる時期に、室内で思い切り走り回ったり、大型の遊具(トランポリン等)を常設したりするスペースが不足している。	視覚的・聴覚的情報の過多：狭い空間に教材や備品が集中するため、注意力が散漫な幼児にとって視界に入る情報が多く、一つの活動に集中しにくい構造的要因がある。	備品の「隠す収納」の徹底：子どもの視界に入る玩具をその時の活動に必要なものだけに限定し、それ以外は目隠しカーテン等で隠すことで、集中しやすい環境(ユニバーサルデザイン)を徹底する。
3	保護者面談のプライバシー確保：児発では保護者からの深い悩み相談が多いが、活動スペースと相談場所が近いため、デリケートな話をする際のプライバシー保護に工夫が必要。	天候による支援密度の偏り：外遊びができない日に室内へ活動が限定されると、幼児のフラストレーションが溜まりやすく、トラブルのリスクが高まる。	

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	サムエルガーデンⅢNAKAMURA (児童発達支援)		
○保護者評価実施期間	2025年 11月 26日		2025年 12月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	9	(回答者数) 4
○従業者評価実施期間	2025年 11月 26日		2025年 12月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6	(回答者数) 5
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 2月 20日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	1. 「静」と「動」を使い分けるメリハリ療育 毎日の「礼拝」で心を落ち着かせ、集中力や他者の話を聞く姿勢を養う「静」の時間と、思いきり体を動かす「動」の時間を明確に分けることで、情緒の安定と発達を促します。	1. 【礼拝：心の土台作り】 単なる儀式にせず、「切り替えのスイッチ」として機能させています。 環境のセットアップ：礼拝前には照明を少し落としたり、BGMを整えたりして、視覚・聴覚から「今は静かにする時間だ」と直感的に理解できる工夫をしています。	スモールステップの承認：1分でも静かに座れた、お祈りの姿勢ができたなど、小さな「できた」を具体的に褒め、自己肯定感に繋げています。
2	2. 年齢別に最適化された安心の環境（児発・放デイの分離） 児童発達支援と放課後等デイサービスのスペースを分けることで、小さなお子様が大きなに遠慮することなく、年齢に応じた「五感を刺激する遊び」に安全に没頭できる環境を整えています。	2. 【児発・放デイの分離：発達への特化】 物理的な分離だけでなく、「発達段階に合わせたプログラム」を徹底しています。 児発（未就学児）：転んでも安全なマットの配置や、全身を使って粗大運動ができる広い動線を確保し、「思いきり動いて脳を刺激する」ことを最優先しています。	スタッフ配置の専門化：児発には遊びを促すスタッフ、放デイには学習や生活スキルの自立を支えるスタッフなど、対象に合わせた関わり方を意識的に使い分けています。
3	3. 社会性を育む「休日・祝日の外出支援」 土曜や祝日には、平日のルーティンとは異なる「非日常の外出イベント」を実施。公共マナーの習得や多様な社会体験を通して、お子様の豊かな経験値と社会性を育みます。	3. 【休日・外出支援：生きた学び】 単なるレジャーではなく、「社会参加のシミュレーション」として設計しています。 事前準備の徹底：行き先を視覚的に提示（スケジュール表や写真）し、見通しを持たせることで、不慣れな場所への不安を軽減しています。	公共マナーの実践：公共交通機関の利用や買い物の体験など、スタッフの見守りのもと「自分でやってみる」機会を意図的に作り、自信を育てています。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	1. 「静」と「動」のギャップによる課題 メリハリを強みにしている分、その「切り替え」に苦労するお子様への配慮が課題になりやすいです。 切り替えの難しさ：礼拝（静）から遊び（動）、あるいはその逆へスムーズに移れないお子様にとって、このコントラストがストレスやパニックの引き金になる可能性があります。	1. 支援の質の「均一化」と「属人化」のジレンマ 強みである「礼拝」や「メリハリのある療育」は、指導するスタッフのスキルに依存しやすいという側面があります。 礼拝での「静かな空気感」の作り方や、外出先での「叱咤の判断」は、経験豊富なスタッフ（ベテラン）の感覚に頼りがちです。	・タイマーの使用や、個別のクールダウン・スペースの確保など、集団のペースに合わせられない子への「中間の時間（移行期）」の設計を強化する必要があると考えます。 ・「静の時間」の具体的な導入手順や、外出時の安全管理をマニュアル化（可視化）し、新人スタッフでも一定のクオリティを保てる仕組み作りが必要です。
2	2. 児発・放デイ分離による「継続性」の断絶 場所を分けて専門性を高めている反面、お子様が成長して児発から放デイへ移行する際のハードルが生じます。 環境変化への不安：児発で慣れ親しんだ環境やスタッフから、放デイへ移る際の変化が大きく、適応に時間がかかる恐れがあります。	2. 環境の分離による「情報共有」の物理的壁 児発（児童発達支援）と放デイ（放課後等デイサービス）を分けて配置していることは大きな強みですが、物理的に場所が分かれていると、スタッフ間でのコミュニケーションが希薄になり、「児発でどのような成長があったか」という情報が放デイ側に引き継がれにくくなります。	・児発の年長児向けに、定期的に放デイのスペースやスタッフと交流する「プレ移行期間」を設けるなど、縦のつながりを意識した取り組みが必要と考えます。 ・合同会議の定例化や、ICTツール（業務ソフト）を活用したリアルタイムな情報共有の強化が求められます。
3	3. 外出支援における「安全性」と「マンパワー」の限界 土日・祝日の外出は魅力ですが、運営上のリスクも伴います。 スタッフの負担と安全管理：事故のリスクが室内より高く、スタッフには高度な注意力と体力が求められます。特定の人員に負担が偏ると、支援の質が低下したり、離職につながったりする恐れがあります。	3. 「専門性」と「労働負荷」のバランス 土日・祝日の外出支援は、お子様や保護者には喜ばれますが、現場スタッフにとっては外出支援は室内療育よりも神経を使い、かつ土日出勤が重なることで、スタッフの心身の疲労（バーンアウト）を招きやすくなります。	・改善の視点：ヒヤリハット事例の徹底的な共有と、外出先での緊急時マニュアルの具体化。また、スタッフの休日出勤に対する「振替休日や手当」など、労務環境の整備も不可欠です。 ・質の高いスタッフが離職してしまうと、事業所の最大の売りである「安心・安全な支援」そのものが崩壊してしまいま